

「東京新聞」の「平和の俳句」の後編を書きたい。

◎「生きている警報機解除春の空 朱宮正喜(84)東京都葛飾区」警報機が鳴り、母に手を引かれて竹やぶに一晩身を潜め、翌朝、無事を確認し、見上げた空を詠んだと言う。恐怖の後、春の空は綺麗に見えたであろう。北朝鮮のミサイルが発射されると、かなりの地域で警報が鳴る。あれは、安全保障環境の変化を煽っているのではないか。ウクライナではロシアの無差別攻撃で、警報のならない日はないだろう。そして、命が奪われない日もないだろう。プーチンの責任は、限りなく重い。

◎「教室にはだしのゲンがない夏 立部笑子(49)愛知県日進市」広島市の教育委員会は、マンガ『はだしのゲン』は被曝の実相に迫りにくいと、図書室から取り下げた。その理由は、浪曲を歌っているが、現代の生活実態に合わないとか、栄養不足の母のために、コイを盗むシーンは教育的に良くないとか、吹き出しそうな理由づけである。ゲンは被曝の実態を伝え、それを乗り越えようと懸命である。皆「ガンバレ、ゲン」と叫んだのではないか。立部さんは『はだしのゲン』が読めなくなるのではないかと案じているが、この論争時から、『はだしのゲン』は爆発的に売れたと言う。日本人は原爆に対しては強い拒絶感を持っている。日本の政治家たちは国民の意思を世界に発信すべきである。

◎「皆の者銃を握るな手を握れ 寺沢大登(15)名古屋市西区」15歳の少年のマンガチックな句であるが、王のような権力者であれば「皆の者」と呼びつけ、「銃を握るな手を握れ」と命令したいと誰もが思うのではないか。同じ日の新聞に、米誌ニューヨークタイムズ電子版は、ロシア兵12万人、ウクライナ兵7万人の戦死者を見積もっているという記事を掲載していた。これらの若者たちは何のために命を落としたのか。家族の悲しみはどのように癒やされるのか。私は、プーチンに「ウクライナからロシア兵を引け」と叫びたい。

◎「武器いらぬ中村哲に続く蟻 吉田咲衣(74)愛知県春日井市」中村氏はアフガニスタンの荒地に水を引き、緑の大地に変えた。中村氏を思うと、預言者イザヤの「彼らはその剣を鋤に/その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず/もはや戦いを学ぶことはない」という言葉を連想する。食べ物を公平に分け、命の尊厳を認め合うところに平和が構築される。銃撃を受けて亡くなられたことは残念でならないが、彼の平和へのメッセージは人々の心に深く残った。彼のメッセージに続く「蟻」でありたい。

◎「一票を使い続けて八十路くる 天野静枝(82)愛知県安城市」敗戦後、78年も経てば、戦争の悲惨をそのまま詠んだ句は少なくなり、少し離れたところから平和を詠む句が多くなったようだ。天野氏は、投票には必ず行ったけれども、平和が段々遠くなったと詠んでいるのではないか。誰を国の指導者にするかに国民の生活はかかっている。ロシアは選挙によってプーチンを大統領にしたが、国が疲弊していくことは目に見えている。日本は岸田文雄氏が首相だが、「聞く耳」は国民に向いてなく、米国首脳の言いなりではないか。

「東京新聞」は、7日の夕刊で「原爆俳句」も掲載していた。◎「蟬鳴くな正信ちゃんを思い出す(行徳功子)」7歳の弟の死を嘆いた、当時10歳の子どもの句で、作句直後に亡くなったという。私が読んだ、ある少年は休み時間には運動場に出て砂を握り占めると言う。この場所で母が焼かれたので、握った砂の中に母がいるのではないかと願ってである。原爆の非情さは底知れない。ロシアの高官たちは、原爆使用をちらつかせて脅しているが、原爆の実態を知っているのだろうか。